

文化・芸術

「12分割円の開花 (A)」

1983年、油彩、カンバス
100.0cm×100.0cm

オノサト・トシノブ (1912~86年)

作品名の通り、12個の角をもつ円が主体モチーフとなっています。幾何学的な形の繰り返しですが、豊かで鮮やかな色彩によって画面に動きが出ています。小さい花が見えたり、大きい花が見えたり、四角が見えたり、ストライプが見えてきたり、と飽きることがありません。作品の大きさも相まって、本作の前に立つと万華鏡の世界に降り立ったような、不思議な気持ちになります。

本作は、最晩年の作品になります。オノサトは晩年、正方形のキャンバスを好んで使用していました。オノサトは長野県に生まれ、10歳の時に父の転勤に伴い、桐生市に移住します。その後、終生桐生の地で芸術活動を展開しました。瑛久をはじめ、彼を慕う画家仲間たちが桐生の地を訪ねることも多くありました。

現在、大川美術館展示室3では「特集展示 オノサト・トシノブ」と題し、オノサトの抽象に至る前の初期作品から、本作をはじめとした晩年の作までをご鑑賞いただけます。
(池田)

名画の扉

大川美術館特集展示から

